

2012年7月21日 於：東京外国語大学語学研究所

東京外国語大学 国際日本研究センター 対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』研究会報告資料

類型論的観点から見た朝鮮語と日本語のひとつの問題

—朝鮮語史における名詞化—借字表記法資料を中心に—

伊藤英人 (東京外国語大学)

## 0. はじめに

「類型論的観点から見た朝鮮語と日本語のいくつかの問題」という仮題が「ひとつの問題(名詞化)」へと縮小変更され、かつ朝鮮語における名詞化の問題のうち、十五世紀以前の借字表記法資料(後述)中に見られるいくつかの現象を考察するに留まり、さらに日本語との対照もほとんどなされていないという、「羊頭狗肉」の発表になったことをお断りと共に茲にお詫び申し上げたい。

朝鮮語を含む類型論的考察には菅野裕臣(1990)、風間伸次郎(2003)という優れた先行研究があり、また伊藤英人(2009)においても総花的ながら日韓対照を試みているが、現在報告者も関与して遂行中の共同研究プロジェクトのテーマの一つが「名詞化」の問題であり、また借字表記法資料における名詞化の問題は日本語圏でほとんど言及されてきていないことから今回の報告の内容を借字表記法資料における名詞化の問題に限定した。

## 1. 前言

本報告でいう「名詞化」とは影山太郎(2011:52)の次の意味で用いる。

名詞化という操作は、動詞が持つ意味構造(行為連鎖)の全体あるいは一部を切り取って、デキゴトまたはモノという名詞の概念に変えることである。

本報告では動詞(後述)からの派生名詞、動名詞のみならず、特に本発表の中心をなす古代朝鮮語(十世紀以前)及び前期中世朝鮮語(十～十四世紀)部分では動詞の連体形が名詞を修飾する構造についても多くの紙幅を割く。なぜならば朝鮮語の歴史を遡れば遡るほど、「連体形」が、連体修飾機能の他に、派生名詞形成、動名詞形成、動名詞としての連用修飾的用法、部分的には終止形(定動詞的)機能をも担っているためである。本

発表は前期中世朝鮮語以前のそうした連体形の諸機能について詳細に考察することとする。

現代朝鮮語(二十世紀以降)の名詞化については既に数多くの研究があるが、ここではそれらには触れず、現代朝鮮語の名詞化の代表的な例を見るに留める。

1 a) ku-ka kyelhon-ha-yess-um-ul molu-ko iss-ess-ta. <sup>1)</sup>

彼-主格 結婚-する-過去-動名-対格 知らない-接続 いる-過去-終結

彼-が 結婚-し-た-の-を 知らない-で いた。

1 b) ku-ka kyelhon-ha-n kes-ul molu-ko iss-ess-ta.

彼-主格 結婚-する-連体 形名-対格 知らない-接続 いる-過去-終結

彼-が 結婚-し-た こと-を 知らない-で いた。

1 c) kil-ul moll-ase cip-ul chac-ki-ka elyep-supnita.

道-対格 知らない-接続 家-対格 見つける-動名-主格 難しい-終結

道-を 知らなく-て 家-を 見つける-の-が 難しいです。

1 d) kil-ul moll-ase cip-ul chac-nun kes-i elyep-supnita.

道-対格 知らない-接続 家-対格 見つける-連体 形名-主格 難しい-終結

道-を 知らなく-て 家-を 見つけ-る こと-が 難しいです。

1a, 1c の {-(u)m}, {-ki} は「動名詞形成接尾辞」であり、動詞性を失わずに、すなわち主語、補語、状況語等を伴ったまま当該の動詞述語を名詞節化する機能を持つ。<sup>2)</sup> 1a, 1c はそれぞれ 1b, 1d のように動詞の連体形+「形式名詞(不完全名詞)」を用いて書き換えることが可能である。

{-(u)m}, {-ki} は一方で名詞派生接尾辞としても用いられる。

2 a) ku malssum-ul tul-um-ulosse mit-um-i sayngki-ess-ta.

その お言葉-対格 聞く-動名-具格 信じる-名派-主格 生じる-過去-終結

その お言葉-を 聞く-こと-で 信心-が 生じ-た。

2 b) tut-ki-ka malha-ki-pota elyep-ta.

聞く-名派-主格 話す-名派-奪格 難しい-終結

リスニング-が スピーキング-より 難しい。

2a の mit-um は動詞 mit-(信じる)に名詞派生接尾辞{-(u)m}がついて「信心, 信念, 信仰」という名詞が派生されたものである。なお, 2b の tut-ki, malha-ki-では動詞 tut-~tul-(聞く), malha-(話す)に名詞派生接尾辞{-ki}が接尾されて tutki (リスニング), malhaki(スピーキング)という名詞が派生されている。なお, 2a の ku malssum-ul tul-um (そのお言葉を聞くこと)の{-(u)m}は動名詞形成接尾辞である。

名詞派生接尾辞の{-(u)m}, {-ki}は現代日本語の連用形による名詞派生と似るが, 現代日本語の連用形には動名詞形成接尾辞の機能はなく, この点で現代朝鮮語と大きく異なる。

動名詞形成接尾辞{-(u)m}, {-ki}は, 終結形語尾(文末述語と成り得る定動詞形語尾)としても機能する。

3a) wi-uy sasil-ul i-ey incengha-m.

上-属格 事実-対格 ここ-与位格 認定する-動名

上-の 事実-を ここ-に 認定す。

3b) cenyek-ey nuc-key tolao-nun salam-i selkeciha-ki.

夜-与位格 遅い-副派 帰宅する-連体 人-主格 洗いものする-動名

夜-に 遅-く 帰宅す-る 人-が 洗いものする-こと。

3c) cenyek-ey nuc-key tolao-nun salam-i selkeciha-l kes.

夜-与位格 遅い-副派 帰宅する-連体 人-主格 洗いものする-連体 形名

夜-に 遅-く 帰宅す-る 人-が 洗いものす-る こと。

3b は 3c のように「連体形+形式名詞」で言い換えが可能である。

影山太郎(2011:222)の言う「動詞的名詞 verbal noun」としての二字漢語の動名詞的性質も現代朝鮮語と現代日本語はこれを共有する。

4a) pukhan taysa wesingthen-ul pangmun, kyopo hwanyeng manchan-ey-to chamye

北朝鮮 大使 ワシントン-対格 訪問, 同胞 歓迎 パーティー-与位格-も 出席

北朝鮮 大使 ワシントン-を 訪問, 同胞 歓迎 パーティー-に-も 出席

4b) uyyakphum-ul phanmay si pokyongcito-lul ha-tolok ha-nta.

医薬品-対格 販売 時 服用指導-対格 する-接続 する-終結

医薬品-を 販売の 際 服用指導-を する-ように する。

日本語の連体形には「逃げるが勝ち」、「すると同時に」のような動名詞的機能が残っているが、現代朝鮮語の連体形にはそうした機能はなく、{-(u)m}, {-ki}がその機能を果たす。<sup>3)</sup>

現代朝鮮語の動名詞形成接尾辞にはさらに{-ci}がある。現代韓国の学校文法ではこの接尾辞のついた形を *converb* と看做すが共時的にも通時的にもこれは動名詞形成接尾辞である。

5) mek-ci-to an-h-ayo.

食べる-動名-も 否定-する-終結

食べ-も しません。

mek-ci は「食べ(食べること)」に相当し、{ha-}(する)の否定形に前置し、迂言的否定を表す。V-ci には格助詞(主格, 対格), 補助詞(日本語のとりたて助詞に相当する)がつき得る。{-ci}は後期中世朝鮮語(十五~十六世紀)の{-ti}に遡及するが、後期中世語の{-ti}は否定のみならず次のような、現代語であれば{-ki}が果たす機能を表していた。

6) kacaj po-ti tioha-ni-ra.(朴上5)

とても 見る-動名 よい-不定-終結

とても 見る-こと よい-の-だ(とても見た目がいい)。

{-ki}は十六世紀頃から多用され始めたことが知られている。

以上で見てきたように、現代朝鮮語には、同一の形態を持つ名詞派生接尾辞と動名詞形成接尾辞が存在し、動名詞形成接尾辞は日本語の「連体形+準体助詞の」の機能を果たしつつ終結語尾としても機能している事実を先に確認しておく。<sup>4)</sup>

また、連体形が動名詞の機能も終結語尾の機能も持たない等の特徴はハングル創製以降の文献語である後期中世朝鮮語においてもほぼ今日と同様である。

以下、本発表では、日本語圏ではあまり言及されることのなかった、ハングル創製以前の借字表記法資料における名詞化の問題を中心に見ていくこととする。<sup>5)</sup>

## 2. 動詞的名詞 verbal noun としての二字漢語

以下、訓民正音創製以前の借字表記法資料の「名詞化」の用法を遡って見ることにする。  
 まず、動詞的名詞 verbal noun としての二字漢語の用法について見てみる。

7) 他矣肝臟乙割出為生氣乙採取人果 (大明 16b)

nam-ii 肝臟-ir 割出 hɔi-a 生氣-rir 採取 人-koa

他人-属格 肝臟-対格 割出する-接続 採取 人-共同

他人の肝臟を摘出し生氣を採取(した)人と

8) 蚕段陽物是平等用良 水氣乙厭却<sup>6)</sup> (養蚕 1 a)

蚕-tan 陽物-i-o-n ti-r psi-a 水氣-rir 厭却

蚕-主題 陽物-繫-対象-連体 形名-対格 用いる-接続 水氣-対格 厭却

蚕は陽の物なので水気を嫌い

1395 年刊行の『大明律直解』及び 1415 年刊行の『養蚕経験撮要』の吏読文の例である。

7) は「生氣を採取」の二字漢語「採取」が目的語を取りつつ後の名詞「人」を修飾しており、8) では「水気を厭却」の二字漢語「厭却」が目的語を取りつつ、中止形のような機能を果たしている。

古代朝鮮語代以来、漢語、特に二字漢語は「する、～だ」を意味する {-hA -} がついて動詞化され、同時に漢語成分は名詞類としての性格を常に持つようになった。<sup>7)</sup> 実際に吏読文の漢語は後に「為 -」を伴って現れることが圧倒的に多い。しかしながら、動詞の意味を持つ二字漢語は、現代朝鮮語や現代日本語と同様にそれ自身が目的語を取ることが出来るという点で、動詞性を吏読文以来維持してきたと見ることが可能である。

口訣資料ではどうであろうか。口訣資料は吏読に比して動詞的名詞としての二字漢語の例ははるかに少ないようである。これは吏読文が表出のための装置であるのに比べて、口訣文が正確な解釈のための装置である、という性格の差に起因するものと思われる。高麗時代の釈読口訣資料である『瑜伽師地論』巻八に次のような例が見える。

9) 由；此障碍<sup>し</sup> 於一切種<sup>し</sup> 「不<sup>ハ</sup>能<sup>ハ</sup>出離<sup>ハ</sup>」(瑜伽 8, 08 - 12)<sup>8)</sup>

i 障-rar pit<sup>h</sup>-ə 一切種-akai 出離 能 antak ha-mie

この 障碍-対格 付く-接続 一切種-与位 出離 能 否定 する-接続

この障りによって一切種に出離あたわず

これは後述する否定形式とも関連するが、「返読点」である「・」に従って読めば、「於一切種ト出離能ハハツカ」の順になり、「一切種に出離」が一つの動名詞句をなしていると看做すことが可能である。

郷札のこの例は見出し難いが、均如伝所載「懺悔業障歌」の

10) 三業…今日部頓部叱懺悔

三業…onar cupi para-pas 懺悔(金完鎮1980)

三業…今日部衆 やつと-こそ 懺悔

三業(を)…今日部衆がやつと懺悔(し)

をこれに加えることが可能であると思われる。ただしこれは金完鎮(1980)の解説に従った場合であり、「部叱」の「叱」{-s}を属格と解釈する金俊英(1964)などの解説に従うなら、動詞的名詞としての二字漢語の用法とは看做せなくなる。

動詞的名詞としての二字漢語は、朝鮮語と漢語の言語接触の結果の産物であり、本来的な朝鮮語の名詞化の問題とは些か異なる。以下3以降で扱う事象が、朝鮮語本来の名詞化の問題である。

### 3. 連体形

#### 3. 1. 後期中世朝鮮語における連体形

先述の如く、朝鮮語はニブツ語やアイヌ語と同じく、形容詞動詞型の言語であり、日本・琉球(Japonic)諸語のように、nomen 的性格の形容詞語根に「く」や「さ」が付き、さらに存在動詞{ar-}の助けを借りて動詞性を獲得したのではなく、形容詞は本源的に状態自動詞である。形容詞語根が単独で用いられたり、それ自体が副詞的機能を果たすことも現代語ではない。ただ、伊藤英人(2009)で述べたように後期中世朝鮮語には次のような化石的な形容詞(以下:状態動詞)語根の単独使用の例がある。

11) ir 門 tannosta. (杜諺七10)

ir 門 tat-na-os-ta

早 門 閉める - 現在 - 感動 - 終結

早く 門を 閉めるなあ。

12) 多迦比迦流 日の御子 (記・景行)

高 光る 日の御子

例文 11) は「早い」を意味する状態動詞の語根 *ir-* が連用修飾語的な働きをしている例で 12) の上代日本語の「たか」の用法と似る。

13) *hanars piəri nun kat tiniŋita.* (龍 50)

*hanar-s piər-i nun kat ti-ni-ŋi-ta*

天 - の 星 - が 雪(の) ごとく 落ちる - 不定 - 丁寧 - 終結

空の星が雪のごとく落ちました。

14) 神の基登 聞こえしかども (記・応神)

神のごとと 聞こえしかども

後期中世朝鮮語では {*kat*} に「～である／～する」を表す {*ha-*} が後接し属格ないし共同格を支配して「～のようだ」を意味するのが普通だが、例文 13) は例文 14) の日本語の「ごとと」の用法を髣髴とさせる。

ここで後期中世朝鮮語の動詞複合体の構造を見てみよう。

動詞語根 - ヴォイス - 謙譲 - {確認/回想} - 尊敬 - 現在 - 感動 - {人称/対象} - 丁寧 - 終結語尾

- 連体語尾

- 接続語尾①

- 接続語尾②

終結語尾とは定動詞語尾、連体語尾は形動詞語尾、接続語尾は副動詞語尾のことである。「現在」接辞 {-*na-*} は後期中世朝鮮語以前の言語では {確認/回想} の位置に出現した。「確認」 {-*kə-*} と回想 {-*tə-*} は相互排他的である。「人称/対象」接辞 {-*o-*} は終結語尾の前では主語が 1 人称であることを、連体語尾の前では被修飾名詞が修飾する動詞の目的語 (対象)

であることを示す。接続語尾①は、{-ko(中止), -mien(条件)}などで(確認/回想)には後行しない。接続語尾②は{-ni(順接・逆接)}などである。

15) nai 高麗王京 irosiəpit<sup>hə</sup> ɔra.(老上 1)

na-i 高麗王京-irosiəpit<sup>hə</sup> o-o-ra

私-主格 高麗王京-奪格 来る-人称-終結

私は高麗王京から来た。

16) uri hanon irar 禁止 hɔia (釈二十三 41)

uri hɔ-nɔ-q-n ir-ar 禁止 hɔi-a

我々 する-現在-対象-連体 仕事-対格 禁止する-接続

我々がする仕事を禁止して

15)の{-o-}は主語が1人称であることを, 16)の{-o-}は「仕事」が「する」の目的語であることを示す。

後期中世朝鮮語の連体形語尾の基本形は次の二つである。

既実現 -n 例 mək-i-n 食べた~, k<sup>h</sup>i-n 大きな~

未実現 -r 例 mək-i-r 食べるであろう~, k<sup>h</sup>i-r 大きかろう~

動作性動詞に-nが接尾されるとアオリスト的過去を, 状態性動詞に-nが接尾されると現在の状態を表す。-rが接尾されると相対的未来テンスないし推量を表す。子音語幹の後には Bindevokal(介) {-ɔ~i-}が挿入される。

既実現連体形語尾{-n}と語幹の間には「回想」, 「現在」などの接辞が入り得る。

mək-i-n 食べる-介-連体 食べた,

mək-nɔ-n 食べる-現在-連体 食べている,

mək-tə-n 食べる-回想-連体 食べていた



後期中世朝鮮語における連体形語尾の機能は基本的に連体修飾機能のみであり、この点で現代朝鮮語と異なるところがない。しかしながら、動名詞的用法の化石的な例として次のような例を挙げる事が出来る。

17) 威化振旅 hasin<sup>aro</sup> 輿望 i ta modcav<sup>ana</sup> (龍 11)

威化振旅 ha-si-n-n-aro 輿望-i ta mod-cav-a-na

威化島回軍する-尊敬-連体-具格 輿望-主格 みな 集まる-謙

威化島回軍さ-れたこと-で 輿望-が みな 集まり-申し上げた-が

18) nuns miri ta<sup>ars</sup> aptota (三綱 132b06)<sup>9)</sup>

nun-s mir-i ta<sup>a-r-s</sup> ap-to-ta-

目-属格 水-主格 尽きる-連体-属格 ない-感動-終結

涙-が 尽きる-こと-の ない-なあ。

例文 17) は「なさる」という尊敬語幹に連体形語尾 {-n} に具格語尾が直接接尾されて「～にしたことで」の意味を表しており、例文 18) は「尽きる」の語幹に連体形語尾 {-r} が接尾され、さらに属格語尾 {-s} が付いている。志部昭平 (1990) は連体形語尾の体言的用法が「ta<sup>a-r-s</sup> ap- (無窮だ) という連語の形で化石化したもの」(ibid. 112) と述べている。

後期中世朝鮮語における連体形語尾は出勤名詞、すなわち動詞から派生された名詞を作る機能をも化石的に残している。

19) nip-i-r 掛け布団 < nip- 被る

er-i-n 大人 < er- 婚姻する

上記 2 語は現代朝鮮語にもそれぞれ、名詞 ipul(掛け布団), elun(大人)として残されている。

3. 2. 借字表記法資料における連体形

3. 2. 1. 古代語

3. 2. 1. 1. -n 連体形

古代語資料として新羅時代の吏読、新羅郷歌十四首、前期中世語として釈読口訣資料の-n 連体形の用法をしてみる。南豊鉉(2000)により、資料を年代順に見ていくことにする。

「新羅華嚴經写經造成記」(754年)

20) 第二 法界一切衆生 皆 成仏欲 為賜以成賜乎 「新羅華嚴經写經造成記」(754年)

hA-SA-n-ARO ir-SA-O-n

する-尊敬-連体-具格 作る-尊敬-人称-連体

第二に法界の一切衆生がみな成仏したいとなさることで作ったのだ。

21) 第二 法界一切衆生 皆 成仏欲 為賜以成賜乎 「新羅華嚴經写經造成記」(754年)

hA-SA-n-ARO ir-SA-O-n

する-尊敬-連体-具格 作る-尊敬-人称-連体

第二に法界の一切衆生がみな成仏したいとなさることで作ったのだ。

22) 為者 「新羅華嚴經写經造成記」(754年)

hA-n-AN

する-連体-主題

したならば

23) 願請内者 永泰二年銘石毘盧遮那仏造像銘(776年)

願請 hA-n-AN

願請する-連体-主題

願請したら

24) 施賜乎 古鐘 「新羅禪林院鐘銘」(九世紀初頭)

poip<sup>h</sup>i-SA-O-n 古鐘

施す-尊敬-対象-連体

布施なされた古鐘

25) 三年間 加 植内 九十 「正倉院所藏新羅出納帳」(八~九世紀)

sim(k)-i-n

植える-介-連体

三年間にさらに植えたもの九十

26) 願為内等者 「竅興寺鐘銘」(856年)

願 ha-n ta-n

願う-連体 形名-主題

願うことは

例文 24) は形動詞的に名詞を修飾しており、26) 形動詞的に形式名詞を修飾している。その他は全て動名詞「～すること」の意味である。そのうち例文 21)は動名詞の終止形的、すなわち、定動詞的用法と看做している。

南豊鉉(2000)は、結論として新羅時代の吏読文において-n 連体形を積極的に表記した吏読として「乎 -on」のみを措定している。「内」は前の文字を訓読みせよとの標識とみなし、特定の音形を与えていない。「内」のない 20), 22), 26) は-n 連体形を「補って」解説を行っている。確かに後世の吏読では例文 8)の「是乎等用良(養蚕 1 a)-i-o-n ti-r psi-a)のように「乎」は -on と読まれるが、新羅時代の吏読文には「隠」のような-n 連体形の明確な音借吏読は現れていないようである。なお、南豊鉉(2000)は「新羅華嚴經写経造成記」中の「莊嚴令只者二青衣童子」の「者」を漢語と見るか(「莊嚴せしめた者、二青衣童子」)、-n 連体形を表す訓借字と見るか(「莊嚴せしめた二青衣童子」)という二つの解釈を示しつつ、後者を採っている。そうした場合、-n 連体形を表記した訓借字として「者」が存在することになる。

郷歌はどうであろうか。記録されたのは十三世紀末という新しい時代であるが一然著『三国遺事』は八世紀以前の郷歌十三首、九世紀のそれ一首が記録されている。郷歌は「郷札」という漢字による新羅語表記法によって記録されている。諸家の解説のほぼ共通し、統語関係が明確な例のみを見てみることにする。<sup>10)</sup>

26) 去隱春 「慕竹旨郎歌」

ka-n pom

去る-連体 春

過ぎ去った春

27) 執音乎手 「献花歌」

cap-Λ-m-o-n son

執る-介-持続-対象-連体 手

執っている手

28) 露曉邪隱月羅理 「讚耆婆郎歌」

parki-ia-n tarar-i

明るい-確認-連体 月-主格

明るい月が

29) 根古 「禱千手観音歌」

k<sup>h</sup>i-n-ko

大きい-連体-疑問

大きいか

30) 哀反多羅 「風謡」

sierv-ə-n ha-ira

哀しい-完了-連体 多い-終結

哀しみが多いなあ

31) 深史隱尊衣 「願往生歌」

kip<sup>h</sup>-i-si-n maΛraos

深い-介-尊敬-連体 尊衣

深くてあられる尊衣

32) 早隱風未 「祭亡妹歌」

iri-n paΛam-ai

早い-連体 風-与位

早い風に

33) 去奴隱処毛冬乎丁 「祭亡妹歌」

ka-n(Λ)-o-n kot motar-a-ntia

行く-現在-対象-連体 ところ 知らない-確認-終結

行くところを知らない

34) 乾達婆矣遊烏隱城叱盼良望良古 「彗星歌」

乾達婆-ii nor-o-n cas-araŋ para-ko

乾達婆-属格 遊ぶ-対象-連体 城-主題 望む-接続

乾達婆の遊んだ城をば望んで

「隠」-(i)n の例はみな例文 29), 30)を除いてすべて連体修飾的用法であり、「乎」も連体修飾的用法である。

「過ぎ去った春(26)」, 「明るい月(28)」, 「深くてあられる尊衣(31)」, 「早い風(32)」は被修飾語が主格の関係にあり, 「執っている手(27)」, 「行くところ(33)」, 「乾達婆の遊んだ城(34)」は対象接辞が-n 連体形に前接されており, 斜格的关系を示している。時制の接辞の含まれない「過ぎ去った春(26)」, 「早い風(32)」は前者が動作動詞であり, 後者が状態自動詞である。例文 26)は「過ぎ去った春は戻って来られぬゆえ」という文脈の中にある。特定の「春」であれ, 一般に「春というもの」であれ, 「過ぎ去」ることが完結した(すなわち春の要素が完全に消え去った)後の時点から春の過ぎ去りをひとかたまりのものとしてアオリスト過去の(および先行タクシスの)に捕らえていると思われる。例文 32)は「ある秋の(時期的に)早い風のためあちこちに舞い落ちる木の葉のように」という文脈の中にあり, 不特定の時間帯における「時間的に早い」という属性を表している。動作動詞と状態自動詞のこうした用法は後期中世語と同じである。例文 33)は 32)に続く文脈で「ある秋の(時期的に)早い風のためあちこちに舞い落ちる木の葉のように, (兄妹として)一つに枝に生まれながら(散ったら=死んだら散り)行くところは分からない」この「行くところ」である。仮想された事態の中での「(決まって)行く」という時間的意味は, 現在接辞{-na-}の前接によって示されている。これも後期中世語と同じである。

連体修飾用法における統語的現象について見てみると,

35) 乾達婆-ii nor-o-n cas-araŋ para-ko(=例文 34))

乾達婆-属格 遊ぶ-対象-連体 城-主題 望む-接続

乾達婆の遊んだ城をば望んで

「遊ぶ」の主体「乾達婆」は属格形で現れている。

例文 29) 「根」は状態動詞語幹  $k^h$ -に-連体形語尾がついて動名詞的用法となり、名詞に直接つく疑問助詞{ko}「～か」がついたものであり、その語幹+連体形語尾を「根」で表している。疑問助詞{ko}は後期中世朝鮮語で

36)  $\text{əstə-n tu po-m ko}$  云何二見 (楞二 79)

どうだ-連体 二つの 見る-名派 疑問

如何なる二見か

37)  $i\text{əstə-n}$  光明 ko (月积十 7)

これ どうだ-連体 光明 疑問

これは如何なる光明か。

のように名詞や出勤名詞に直接付くが、後期中世朝鮮語の疑問語尾  $-nko$  (～したが、～であるか) も起源的には連体形の名詞的用法に起源すると考えられる。

「哀反」は状態動詞語幹  $siərv$ - (哀しい) に完了接辞がつき、連体形語尾がついて派生名詞  $siərv-a-n$  (悲しみ) となっている例であると考えられる。<sup>11)</sup>

中国史書、『日本書紀』、『三国史記』、『三国遺事』の漢字表記、片仮名表記の例を見てみよう。

『梁書』新羅伝に見える「建牟羅(金城)」、『周書』百濟伝の「韃吉之(王)」、『日本書紀』の「コニキシ(王)」の「建」, 「韃」, 「コニ」を南豊鉉(2009)は後代の  $k^h$ in, すなわち「大きい」の語幹に  $-n$  連体形がついた連体修飾的用法と見る。後代の  $k^h$ in  $k^h$ ica(大きな王)に相当する。一方で南豊鉉(2009)は「族長」を意味する「干」; 「韓」を  $-n$  連体形の動名詞形と看做している (ibid. 218-219)。<sup>12)</sup>

報告者は古代語における「大きい」の語幹を  $\{k^h\Lambda-\}$  [ $*k^h\Lambda$ ], 「建」, 「韃」, 「コニ」を語幹に  $-n$  連体形のついた  $*k^h\Lambda n$  [ $*k^h\Lambda n$ ] と見る。『日本書紀』の古訓は当然のことながら甲乙を示さない片仮名表記であるが、後述の「己保利  $k^h\text{ōfori}$  郡, 評」などの例から推して「コ」は乙類であったと考え得る。一方、「干」には、 $\{k^h\Lambda-\}$  に完了接辞  $\{-a-\}$  が付きさらに  $-n$  連

体形のついた\*kanを想定する。例文 30)の「哀反」は \*siervan [\*jerβan]「哀しいこと」の意味と解し得ると思われる。十五世紀朝鮮語の名詞派生接辞{-m}が完了接辞{-a/ə-}を介在させると日本語の「情態言」ないしは一部の「居体言」のような「～の情態のもの」、「～の結果なされたもの」の意味を持つ。

38) mut-(埋める) : mut-ə-m (墓)

39) cuk-(死ぬ) : cuk-ə-m (屍体)

40) kucic < \*kucit (叱る) : kucir-a-m (小言)

-n 連体形が名詞派生の機能を備えていた古代語における「哀反」, 「干」をそれぞれ \*sierv-a-n(哀しいこと), \*ka-a-n > kan (大いなる者) と解すれば意義と音形の説明が容易になる。「反」, 「干」の中古音形はそれぞれ, \*pi<sup>w</sup>ɔn<sup>3</sup>, kân<sup>1</sup>である。

連体形の用法について述べれば, 例文 21)と 25)の-n 連体形の定動詞的用法は, 「乎」という-n 無表記の例ながら, 朝鮮語史の中で特記すべき用法である。

### 3. 2. 1. 2. -r 連体形

新羅時代の吏読文には-r 連体形の表記例はないようである。郷歌では周知の如く「尸」で表記されるが, 「尸」は末音添記として-rh の表記にも用いられる。<sup>13)</sup>

41) 道尸 kirh 「慕竹旨郎歌」

「尸」の朝鮮伝来漢字音は si であるが, これが流音を表記するのに使用されるのは, その上古音の onset が「歯擦音+流音」の cluster あったためである考えられている。-r 連体形の郷歌の表記例を見てみよう。諸家の解説のほぼ共通し, 統語関係が明確な例のみを見る点は-n 連体形と同断である。

42) 慕理尸心未 行乎尸道尸 「慕竹旨郎歌」

kiri-r maZAM-AI niə-o-r kirh

慕う-連体 心-与位 行く-対象-連体 道

慕う心に行く道

43) 蓬次叱巷中宿尸夜有叱下是 「慕竹旨郎歌」

taboci-s kurhəŋ-əi ca-r pam isia-ri

蓬-属格 巷-与位 宿る-連体 夜 ある-終結

蓬の巷に宿る夜あろうか

44) 臣隱愛賜尸母史也 「安民歌」

臣-in taz-A-si-r əzi-i-ə

臣-主題 愛する-介-尊敬-連体 親-繋-接続

臣は愛しなざる親であり

45) 為賜尸知民是愛尸知古如 「安民歌」

ha-si-r ti 民-i taz-A-r ar-ko-ta

言う-尊敬-連体 形名 民主格 愛する-介-動名 知る-推量-終結

言うけれども民が愛を知っていよう

46) 此矣彼矣浮良落尸葉如 「祭亡妹歌」

i-əi tiə-əi ptiətəi-r nip kat

これ-与位 それ-与位 落ちる-連体 葉 如く

あちこちに落ちる葉のように

47) 道尸掃尸星利望良古 「彗星歌」

kirh psi-r piəri pARa-ko

道 掃く-連体 星 望む-接続

道を掃く星を眺め

48) 行尸浪阿叱沙矣以支如支 「怨歌」

niə-r mirskiər-ai-s morhai-(i)-ro-ta

行く-連体 浪-与位-属格 砂-繋-感動-終結

過ぎ行く浪における砂であるなあ

49) 民焉狂尸恨阿孩古 「安民歌」



民-in əri-r hΛ-n ahΛi ko

民-主題 愚かだ-連体 である-連体 子供 であると

民は愚かなる子供であると

50) 為賜尸知民是愛尸知古如「安民歌」

hΛ-si-r ti 民-i tΛz-Λ-r ar-ko-ta

言う-尊敬-連体 形名 民-主格 愛する-介-連体 知る-推量-終結

言うけれども民が愛を知っていよう

例文 42)から 48)は連体修飾的用法であり, 49), 50)が動名詞的用法である。45)は -r ti (～すること)という「連体形+形式名詞」が全体として逆接の接続語尾のような機能を果たしている」と解釈される。

「慕う心(42), 愛しなざる親(44), あちこちに落ちる葉(46), 道を掃く星(47), 過ぎ行く浪(48)」は被修飾語が主格の関係にあり, 「蓬の巷に宿る夜(43)」では斜格の関係にある。テンス的には特定されない時間に起こることがらを表しており, 未来テンス, 後行タクシスではないように見受けられる。例文 46)を含む前後を引用してみると

51) 於内秋察早隱風未此矣彼矣浮良落尸葉如一等隱枝良出古去奴隱処毛冬乎丁

ある秋の(時期的に)早い風に(吹かれて)あちこちに落ちる葉のように(兄妹として)

一つに枝に生まれながら(散ったら=死んだら散り)行くところは分からないなあ

の「落ちる葉」に「尸」-r 連体形が用いられており, 仮構された状況内での「風によって落ちるような葉」と解釈される。

動名詞的用法のうち 49)の「愛尸 tΛz-Λ-r」は動詞 tΛz-が Bindevokal を伴いつつ-r を接尾して「愛すること」の意味を成している。例文 18)の後期中世語の taΛr (尽きること)と同様である。

### 3. 2. 2. 前期中世語

#### 3. 2. 2. 1. 先行研究

前期中世語は字吐積読口訣資料について見る。原文との対比から文意が特定でき、用例が豊富な上、長い文が頻出するためである。字吐積読口訣資料は以下の通りである：

資料名	推定年代
① 釈華嚴經分記中釈読口訣	十世紀中葉
② 華嚴經疏 卷三十五	十一世紀～十二世紀初
③ 華嚴經 卷十四	十二世紀前半期
④ 合部金光明經 卷三	十三世紀初
⑤ 旧訳仁王經上卷落張	十三世紀前半期
⑥ 瑜伽師地論 卷廿	1246 年以後

前期中世語字吐積読口訣資料の -n 連体形、-r 連体形の出現環境については南豊鉉 (1999a) が詳細な分類を行っている。そこではそれらは「n 動名詞」、「r 動名詞」と名づけられ、基本的に動名詞とされている。南豊鉉 (1999a) による分類を示せば以下のとおりである (ibid. 385-887)。

#### 1) 助詞との結合<sup>14)</sup>

##### ) 助詞との結合

	n 動名詞	r 動名詞
属格	hanai	horai
属格	hanas	
对格	hanar	horar
处格	hanaikai	horaikai
造格	hanarro	horarro
共同格		horkoa

主題	hanan	horan
亦是(も)	hanto	harto
強勢(こそ)	hansa	
繫辞	hanimia	

2). 助詞の省略と不定格  
(省略)

3) 体言の修飾

(1) 自立名詞の修飾 han pstai(pskii) ～した時, har 十二大衆 等

(2) 依存名詞の修飾

4) 語末語尾との結合

han ia ～したのであり 等

5) n 動名詞の前提機能と接続的機能

6) 否定法における被否定辞

n 動名詞

r 動名詞

han anti-

har antarha- 等

以下では、釈読口訣のうち新しい時代の文献である『瑜伽師地論』について-n 連体形, -r 連体形の用法を瞥見する。<sup>15)</sup>

3. 2. 2. 2. -n 連体形

先に体言を修飾する例から見る。

52) ocik 余依-sa isi-n 涅槃-s 界-rar(証得) ha-kia-ri-ra 06,07-13

ただ 余依-こそ ある-連体 涅槃-属格 界-対格 証得する-いる-推量-終結

ただ余依こそある涅槃の界を証得しているだろう

53) 故 ho 遠離-i-n 内心寂靜 奢摩地定-ir cirki-r antar ho-r-koa 10.08-15

故に遠離-繋-連体 内心寂靜 奢摩地定-対格 楽しむ-連体 否定 する-連体-共同  
故に遠離である内心寂靜奢摩地定を楽しまないことと

54) 諸出家者-ai 受 ha-n pa-s 尸羅-nan 17,05-10

諸出家者-属格 受する-連体 ところ-属格 尸羅-主題  
諸出家者が受けたところの戒は

例文 52), 53)は一般名詞修飾, 54)は形式名詞修飾の例である。例文 54)の動詞の主体は属格で現れている。

55) monciha 毘鉢遮那品-ir 修行 antak ha-n 故 ho 14,11-17

先に 毘鉢遮那品-対格 修行 否定 する-連体 故に  
先に 毘鉢遮那(観)品を 修行 しなかった故に

56) imiisa 根本三摩地-rar 証得 ha-ia-n ta-ro 故 ho 16,09-16

すでに 根本三摩地-対格 証得する-完了-連体 形名-具格 故に  
すでに根本三摩地を証得している故に

57) 壊色衣-ri r 著 ha-kə-n ta-ro 故 ho 16,16-22

壊色衣-対格 著 する-確認-連体 形名-具格 故に  
壊色衣を著した故に

58) iətki 説 ho-n(h a-o-n) pa-s 三摩地自在-oa-rar 19,22-20,02

今 説 する-対象-連体 ところ-属格 三摩地自在-共同 対格  
今説いたところの三摩地自在とを

59) 心一境地-rar 証得 ha-kiə-n ta-ro 故 ho 23,18-23

心一境地-対格 証得する-いる-連体 ta-ro 形名-具格 故に  
心一境地を証得している故に

60) 奢摩他支-akai 不従順 ha-n 性 iə 26,19-27,03

奢摩他支-与位 不従順な-連体 性と  
奢摩他支に不従順な性と

例文 55), 56)のような「既然」を意味する時間副詞や 58)の「今」のような時間副詞の後では基本的に-n 連体形が出るようである。56), 57)のような「完了」, 「確認」の接尾辞が前接されている用例も見られ, 先行を表している。59)は補助動詞に付いた例である。60)のように状態性動詞に付くと同時を表す。

次に動名詞的用法を見てみよう。

61) 無余依涅槃-*oa-rar* 依止 *ha-n-i-ta* 04,19-05,01

無余依涅槃-共同-対格 依止 する-連体-繫-終結

無余依涅槃とを依止したものである

62) 正法-*ir* 聴聞 *ha-n-ai* 得 *hon(ha-o-n)* *pa-s* 勝利 *ia ho-ri-ta* 05,23-06,07

正法-対格 聴聞する-連体-属格 得 する-対象-連体 所-属格 勝-と言う-人称-終結

正法を聴聞した者が得た所の勝利と言おう

63) 三種雑染 相応 *ha-n* *is-ta* 20,23-21,06

三種雑染 相応する-連体 ある-終結

三種雑染 相応したの(が)ある。

64) *kasāia* 若過 *ha-ciāi* 若増 *ha- ciāi* *ha-n* 無 *ha-n-i-ntiā* 29,19-30,01

更に 若過する-接続 若増する-接続 する-連体 無する-連体-繫-終結

更に若過したり若増したりしたもの(が)無いのだ

いずれも動名詞的用法と解される-n 連体形の例である。62)は後述する -n-*ā-s*(n 連体形+介+属格)との違いが問題となる。*ha-n-ai* は「~した者の」と解される可能性がある。

64)は後に否定的な動詞「無 *ha-*」が続いている。同様の例は2箇所現れる。後述するように否定動詞{*antarha-*}に先行するのは-r 連体形のみであるが, 「無い」の前には-n, -r の二つの連体形が現れる。上の例文の和訳を「~したもの」としたが, 例文 61), 63), 64)などは「するもの」であるか「したもの」であるかの判断は困難である。<sup>16)</sup>

以上の-n 連体形は全て略体口訣字「1/n」で表されるものであったが, さらに略体口訣字「ヒセ/nas」によって表されるものを見る必要がある。南豊鉉(1999a)は「ヒセ/nas」を「\*

「 $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda\text{-s}$ 」の連続が不可能であるため動名詞的用法の $-\text{n}$ 連体形に母音を介在させて属格「 $\text{h}\Lambda\text{-s}$ 」を付けたものと看做している。『瑜伽師地論』には合計 19 個の「 $\text{h}\Lambda\text{-s}$ 」の用例が出現する。いくつかの例を見てみよう。

65) 正信  $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda\text{-s}$  長者  $\text{i}\text{ə}$  居士  $\text{i}\text{ə}$  03,15-22

正信する-連体-介-属格 長者や 居士や  
正信するの長者や居士や

66) 軌範- $\text{ir}$  壊  $\text{ho}(\text{h}\Lambda\text{-o})\text{-n}\Lambda\text{-s}$  中- $\text{ak}\Lambda\text{i}$  06,17-07,02

軌範-対格 壊する-対象-連体-介-属格 中-与位  
軌範を壊すの中に

67)  $\text{imiisa}$  三摩地- $\text{rar}$  得  $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda\text{-s}$  者- $\text{nan}$  15,04-09

すでに 三摩地-対格 得する-連体-介-属格 者-主題  
すでに三摩地-得するの者は

68)  $\text{ti}\text{ə-rar}$  共居  $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda\text{-s}$  増上力- $\Lambda\text{ro}$  26,09-14

それ-対格 共居する-連体-介-属格 増上力-具格  
それを共居するの増上力で

$-\text{n}\Lambda\text{-s}$  に前接する動詞は『瑜伽師地論』では  $\text{h}\Lambda\text{-}$ (する)のみである。被修飾名詞には「過失, 長者, 中, 婆羅門, 愛味, 涅槃界, 増上力, 時, 者, 此因縁」が出現する。「此因縁」では被修飾名詞の前に他の要素が介在している。

Hwang(2000)は  $-\text{r}$ ,  $-\text{ris}$ ,  $-\text{n}$ ,  $-\text{nas}$  について全ての釈読口訣資料の用例を分析し,  $-\text{nas}$  は補文, 関係節の双方に出現し, また被修飾名詞が主語である場合, 被修飾名詞が自立名詞である場合に出現するという点で $-\text{n}$ と共通するが,  $-\text{n}$ とは異なり, 被修飾名詞が固有語の形式名詞である場合, また被修飾名詞が意味上の目的語である場合には $-\text{nas}$  は出現しないという事実を述べている。例文 56) と 67) の違いは Hwang(2000)の述べる「形式名詞修飾」と「自立名詞修飾」の差で説明し得る。報告者は南豊鉉(1999a)の見解通り, 動名詞的用法の $-\text{n}$ 連体形に母音を介在させて属格「 $\text{h}\Lambda\text{-s}$ 」を付けたものと看做す。また Hwang(2000)は「 $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda$ 」を形式名詞と看做す諸先行研究に反駁しつつ, 『旧訳仁王経』の「 $\text{h}\Lambda\text{-n}\Lambda$ 」

の例を挙げ、これをもって「 $\epsilon/n\Delta$ 」を形式名詞と看做す根拠とはならないとし、動名詞性を強調するための「 $1/n$ 」添加と看做している。

しかしながら『瑜伽師地論』にも見える次のような「 $\epsilon/n\Delta$ 」は依然として説明がつかない。

69) 親戚交遊  $i\epsilon$  談議  $i\epsilon$   $tah\Delta-n\Delta$   $tu-a$  26, 9-14

親戚交遊や 談議や のようなもの ある-接続

親戚交遊や 談議や のようなもの あって

これらの「 $\epsilon/n\Delta$ 」は次に「有る、為に、非ず」が後接し、動名詞的用法と見られるが  $-a-$  の介在の理由は説明し尽くされておらず、例文 63) などとの違いも明らかでない。

次は否定辞に先行する  $-n$  連体形の例である。

70) 思  $hom(h\Delta-oms)-h\Delta-n$   $anti-i-n$   $kot-ak\Delta i$  12, 07-16

思 する-意思-する-連体 否定-繋-連体 ところ-与位

思おうとすることでない所に

名詞否定辞の「非  $\Delta$ , 不  $\Delta$ , 未  $\Delta$   $anti$ 」の前には  $-n$  連体形 (及び上述の) 「 $\epsilon/n\Delta$ 」が立ち得るが、否定動詞「不  $\Delta$   $\Delta$   $antarh\Delta-$ 」の後には  $-r$  連体形しか現れない。

最後に南豊鉉(1999a) のいう「 $n$  動名詞の前提機能」の用例を見よう。

71)  $nir-o-n$   $ci\epsilon-ro$   $p\epsilon ki-a-kim$  16, 16-22

いう-対象-連体 自分-具格 誓う-接続-接続

いわく自ら誓って

「謂  $1$ 」の形でほとんど毎張出現する  $niron$  の  $-n$  連体形は、日本語のク語法(いはく、まをさく)のように用いられる。

### 3. 2. 2. 3. $-r$ 連体形

『瑜伽師地論』における-r連体形の用例を見てみよう。

71) i tahi 疑-i 随逐 ha-n ta-ro … 疑-rir 遣 ho(ha-o)-r-i-s 因縁-ir 障碍 ha-r  
ta-ro 11, 21-12, 01

このように 疑-主格 随逐する-連体 形名-具格 … 遣 する-対象-連体-形名-属格 因  
縁-対格 障碍する-連体 形名-具格

このように疑が随逐する/したことで…疑を遣するものの因縁を障碍することで

72) 堪能 ho(ha-o)-r pa 無 ho(ha-o)-r-i-s 過失 tu-miə 14, 06-11

堪能する-対象-連体 ところ 無 する-対象-形名-属格 過失 ある-接続  
堪能するところ無いものの過失あり

73) 欲 ho(ha-o)-r ta-r coc<sup>h</sup>-o niə-r antarha-a 16, 22-17, 05

欲する-対象-連体 形名-対格 従う-副派 行く-連体 否定する-接続  
欲するところから従って行かず

74) i tahi 欲樂-ar na-i-r imisa ha-anar 29, 05-08

このように欲樂-対格 生ずる-使役-連体 すでに する-接続

このように欲樂を生じさせることをすでにしたなら

75) 極清浄道-ia mis 果功德-ia ho(ha-o)-r-ar 証得 ho(ha-o)-r-koa 31, 17-23

極清浄道-だの 及び 果功德-だの 言う-対象-連体-対格 証得する-対象-連体-共同  
極清浄道だとか、及び 果功德とかいったことを証得することと

76) 間断 ho(ha-o)-r 無 ha-n ta-ro 07, 02-06

間断 する-対象-連体 無する-連体 形名-具格

間断すること無い ことで

77) 勝三摩地-rir ət-u-r antak-ha-i-r-i is-ta 13, 04-07

勝三摩地-対格 得る-対象-連体 否定-する-使役-連体-形名 ある-終結

勝三摩地を得ることをしなくさせるものがある。

78) maZam-akai 沈没 ho(ha-o)-r əps-ə-kim 15, 18-16, 01

心-与位 沈没する-対象-連体 無い-接続-接続

心に沈没することなきよう



例文 71)から 73)が連体修飾的用法, 74)から 78)が動名詞的用法である。72), 73)のように否定的な要素が後続する被修飾名詞の連体修飾に-r 連体形が用いられるようである。74)は「欲樂を生じさせるようなこと」の意と解し得る。75)のように「~だの~だのとといったこと」のように前に列挙の{-ia}が複数回出現した後の「~といったこと(をする)」には-r 連体形が動名詞的に用いられる。<sup>17)</sup> 76)から 78)は後に否定辞や「無い」の意味の語が来る例である。

以上のことから-r 連体形は時間的未実現というよりも、仮構された、あるいは叙想なデキゴトを表していると考えられ、そのことは上述の郷歌の例に通ずる。<sup>18)</sup>

南豊鉉(1999a, b, 2000)は「尸」に{-rʰ}を再構しつつその起源を{-rs}と看做している。このことを敷衍すれば「尸」に後続する/k, t, p, c, s/は濃音であった、そしてその古形は/sk, st, sp, sc, ss/であったと看做していることになる。

周知の如く十五世紀朝鮮語の「濃音」では、ss- hh- のみが語頭に出現し得る一方、/k, t, p, c/の濃音は-r 連体形の後にしか出現し得ないという制約を有する。<sup>19)</sup> 後期中世語から近代語にかけて語頭で生じた sk>k', st>t', sp>p' 等の変化が前期中世語において-r 連体形の前で先んじて生じていたと考えられ、これを河野六郎(1950/1979)の「第一口蓋音化」に倣って「第一濃音化」と称したい。

一方、古代語における連体形「尸」は、-rs を表記したものとする。「連体形(動名詞=名詞類)+属格+名詞」が主格的関係のみならず、目的語的關係を表すことは後期中世語にもあり得る；例：mis məkum 水を飲むこと(三綱 114a07), lit. 水の飲み。「尸」は新羅郷歌では-rh の表記にも「道尸」の如く用いられている。「尸」の上古音における音節頭が「齒擦音+流音」の cluster であったことを勘案すれば新羅郷歌における「尸」は-r のみならず「-r+無声摩擦音」に用いられたと考える。

#### 4. 語幹形

南豊鉉(2009)は『旧訳仁王経』や『大明律直解』の次のような例を引きつつ、否定辞の前に動詞の語幹形が立ち得ることを述べている。

79) 觀 ha antarha- 『旧訳仁王経』(南豊鉉 2009:234)

観 する 否定

見ない

80) 雨漏分置使内不冬『大明律直解』(南豊鉉 2009:228)

雨漏分置使 pari antar

雨漏分置使 遣いだてる 否定

雨漏分置 させない

下線を引いた ha, pari はいずれも動詞 ha-(する), pari-(遣いだてる) の語幹の形である。現代語でも

81) o-to ka-to mosha-nta

来る-も 行く-も 出来ない-終結

来ることも行くことも出来ない。

82) nuc-pom

遅い-春

晩春

のように動詞 o-(来る), ka-(行く)の語幹に助詞が付く例や、状態自動詞 nuc-(遅い)の語幹がいきなり名詞について複合語を作る例に残っている。

3. 2. 2. 1. で『日本書紀』のコニキシ(王)の例を見たが、『日本書紀』古訓には「王」を表す「コキシ」が見える。これは「大きい」を意味する{\*ka-}[\*ka]の語幹に「王」(後代形: kiica)が直接ついたものと考えられ、状態動詞語幹の独立的用法と看做し得る。同様に上代日本語の kōfori 己保利(催馬楽): 評, 郡)も{\*ka-}[\*ka]に城邑を意味する韓系百濟語 \*puuri(新羅語形: pur : 伐, 火, [金本])が付いた \*kapuuri の借用語と看做し得る(新羅語形 \*kapur > 後期中世語 \*kaβar > 現代語 koul 「郡」)。

5. 動名詞接辞, 名詞派生接辞

『瑜伽師地論』における略体口訣字「エ m」の用例は次の 1 例である。

83) 犯戒 ha-n ta-r pit<sup>h</sup>-ə ar-Λ-m cə-ro 懇責 ha-r antArha-ciəi 17,10-17

犯戒 する-連体 形名-対格 よる-接続 抱く-介-名派 自ら-具格 懇責する-連体 否定-終結

犯戒したことにより私(を)自ら懇責しないこと

「私<sup>立</sup>」と表記された arΛm は後期中世語の「arΛm(公に対する)私」に相当すると考えられ、動詞 an-(抱く)からの派生名詞と看做される。

「<sup>立</sup>m」と同じく「音」の略体口訣字である「<sup>音</sup>m」はその用例が多いが、ほとんどは{-ms-}という「意思」の接尾辞であり、動名詞的用法は「～すべき」を意味する{-m cis ha-}の例が5例見られる。

84) tio-nin 戲論界-akΛi 易-hi 安住 ha-m cishΛ-n-iə 20,13-17

それは戲論界-与位 易-副派 安住する-動名 ような-連体-とか

それは戲論界に易く安住するようなものや

新羅郷歌における「音」のこれらの用法の例は以下の如くである。

84) 三花矣岳音見賜烏戸聞古 彗星歌

三花-hi ori-m po-si-o-r tit-ko

三花-属格 登る-名派 見る-尊敬-対象-連体 聞く-接続

三花の山見られるのを聞いて

動詞 ori-に名詞派生接辞-m の付いた形と解される。

## 6. 小結

以上、本発表では、訓民正音創製以前の借字表記法資料のうち、新羅吏読資料、新羅郷歌、高麗時代の字吐積読口訣資料(『瑜伽師地論』)、鮮初吏読資料(『大明律直解』、『養蚕経験撮要』)の用例から、連体形の連体修飾用法と動名詞的用法、名詞形の用法、二字漢語の動詞的名詞の用法等について瞥見した。二字漢語の動詞的名詞の用法は鮮初

吏読資料にも「～乙採取（～を採取）」の如き現代朝鮮語と同様の用法が確認された。新羅吏読資料、新羅郷歌の連体形には連体修飾用法と動名詞的用法が確認され、派生名詞形成接辞としても連体形が機能していた様相がうかがわれる。日本語の「情態言」、「居体言」的な-n連体形に本報告では \*a·n を再構した。『瑜伽師地論』については-n連体形、-r連体形の双方が連体修飾用法と動名詞的用法を兼ね備えている様相が見られた。新羅資料、『瑜伽師地論』双方の用例から、-r連体形は、現代語のような「時間的未実現」の意味よりも潜在的、叙想の世界で実現することがらを表していたと考えられる。郷歌の「尸」及びそれに由来する略体口訣字は「r+無声摩擦音」表記であり、高麗釈読口訣資料では南豊鉉氏の再構する{r}であったと考えられる。そこから敷衍すれば、高麗時代には「第一濃音化」が起こっていたと考えられる。動詞語幹形が動名詞的に機能することも古代語、前期中世語の双方に確認された。名詞派生の{m}についても古代朝鮮語、前期中世朝鮮語の用例が確認された。

・本発表は借字表記法の連体形、名詞形についての九牛の一毛であることは言うまでもない。

#### 注

- 1) 転写および略語は注の後、参考文献の前の「転写」、「略語」参照。
- 2) 朝鮮語は動詞と形容詞の形態上の区別がなく、形容詞は形容詞的意味の動詞で表される。以下、「動詞」を verbal の意味で用いる。
- 3) 日本語の連体形が終止形的機能を有し、歴史的に本来の終止形を駆逐したことは周知の事実である。日本語やアルタイ諸語のように連体形が終止形の機能を兼ねることは朝鮮語史においては、古代語の例を除いて、まずなかったと言ってよい。日韓の両現代語における連体形終止文（例：失敬な！）の対照研究は管見の限りなされていないようである。現代朝鮮語の場合、celen!(lit. あんな→全くけしからん)、yuksilel < yuksi-l ha-l(lit. 戮屍をすべき→畜生!), pil-e-mek-ul(lit. 乞食すべき→おのれ!), ~ kathun!(~のごとき)のような罵倒語、卑語に散見されるようである。
- 4) 後期中世語 {ai~ii}に遡及する名詞派生接尾辞 {-i}は生産性を喪失しており、本発表では扱わない。
- 5) 借字表記法とは漢字を用いて朝鮮語を表す書記体系を謂う。吏読、郷札、口訣資料の一部のように漢字を用いたものと、日本語の片仮名と似た漢字の略体（略体口訣）を用いた釈読字吐口訣資料等がある。本発表の対象は主に釈読字吐口訣資料、吏読資料である。ヲコト点資料に相当する点吐資料、順読字吐口訣資料は扱わない。

- 6) 便宜上常用漢字体を用いる。吏読の訓みは諸先行研究に拠るが転写は発表者による。
- 7) 明確に「漢語+{-hA-}」と看做し得る例は「新羅華嚴經写經造成記」(754年)の「若大  
小便為哉」である。南豊鉉(2000:218)参照。{-hA-}が対抗中国化の一手段と考えられ  
ることについては伊藤英人(2010)参照。
- 8) 下付きは左側, 上付きは右側の訓点である。
- 9) 『三綱行実図諺解』の引用番号は志部昭平(1990)の定本による。
- 10) 解説は金完鎮(1980)に従う。
- 11) 完了接辞については志部昭平(1990)参照。金完鎮(1980)は siarven とするが, 発表者は  
siarvan と見る。
- 12) 「韓」が漢語形態素であることは伊藤英人(2012)で詳論した。
- 13) 末音添記とは名詞語幹末子音を書き添える借字表記法である。例: 「心音 mazam 心」,  
「千隱 cimin 千」, 「風音 param」
- 14) 南豊鉉(1999a)でいう「助詞」とは本発表でいう語尾のことである。また「処格」は「与  
位格」, 「造格」は「具格」のことである。「する」を意味する {hA-} の形で示されてい  
る。「依存名詞」は「形式名詞」のことである。
- 15) 文献張次は南豊鉉(1999b)による。
- 16) 『国訳一切経』の訓読で例えば例文 61) 部分の訓読は「無余依涅槃に依止するなり」  
となっている。
- 17) 列挙の {-iə} が複数回出現した後の「~といったこと(がある)」の場合は例文 69) のよう  
な「E nA」が来る。また「~といったこと(がない)」の場合例文 64) のように -n 連体  
形が来る。
- 18) この用法は現代語の tul-ul-i(聞き手), malha-l-i(話し手)などに化石的に残っている  
と考えられる。
- 19) 十五世紀朝鮮語の複子音については福井玲(1993)参照。

転写

略体口訣

ㄱ a, ㅅ cœi, ㅇ hA, ㅋ hi, ㆁ ho, ㄴ ho, ㄹ i, ㅂ iə, ㅍ ii, ㅊ kai, ㅋ kə, ㆁ  
ki~k, ㆁ ki~hi, ㆁ kie, ㆁ kim, ㆁ ko, ㆁ koa, ㆁ miə, ㆁ m, ㆁ m, ㆁ n,  
ㆁ na, ㆁ na, ㆁ o, ㆁ pa~pi, ㆁ r, ㆁ r, ㆁ ri, ㆁ ri, ㆁ ro, ㆁ s, ㆁ sa,  
ㆁ si, ㆁ siə, ㆁ ta, ㆁ tA, ㆁ tA, ㆁ tai, ㆁ ti, ㆁ tieŋ, ㆁ to, ㆁ tu, ㆁ tar

後期中世朝鮮語, 他の借字表記法資料の転写は略体口訣に準ずる。次清字は 溪母 k<sup>h</sup>, 清母 ch<sup>h</sup>の如し。影母は ʔ, 日母は z, 奉母は v, 有声声門摩擦音は f。上声は必要に従って ǝ のように示す。

現代朝鮮語は Yale system に従う。

#### 略語

「～格」は, 現代語は「～格助詞」, 後期中世語以前は「～格語尾」  
意思: 意思接尾辞, 介: Bindevokal, 過去: 過去接辞, 感動: 感動法接辞, 完了: 完了接辞, 疑問: 疑問助詞, 共同: 共同格助詞・共同格語尾, 繫: 繫辞, 形名: 形式名詞, 現在: 現在時制接辞, 使役: 使役接辞, 続: 持續接辞, 終結: 定動詞語尾, 主格: 主格助詞・主格語尾, 主題: 主題格助詞・主題格語尾, 推量: 推量接辞, 接続: 副動詞語尾, 尊敬: 尊敬接辞, 対格: 対格助詞・対格語尾, 対象: 対象活用接辞, 丁寧: 丁寧接辞, 動名: 動名詞形成接辞, 人称: 1人称接辞, 否定: 否定副詞, 副派: 副詞派生接辞, 不定: アオリスト接辞, 名派: 名詞派生接辞, 与位格: 与位格助詞・与位格語尾, 連休: 形動詞語尾

参考文献 (アルファベット順, 日本語はヘボン式, 朝鮮語は Yale system)

福井玲(1993)「中期朝鮮語の複子音と濃音について」『東京大学教養学部外国語科研究室紀要』41-5, 東京大学

伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究』汲古書院

伊藤英人(2009)「類型論 mich 言語接触 uy 観点 eyse pon 韓国語 wa 日本語」『朝鮮語史研究』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京

伊藤英人(2010)「朝鮮半島の書記史—不可避の自己としての漢語—」『続「訓読」論』勉誠出版所収

伊藤英人(2012)「朝鮮半島の漢字文化—中国圧への対処と日本語への影響—」 神奈川大

学外国語学研究科欧米言語文化専攻主催 2012 年度第 1 回講演会要旨  
2012 年 7 月 14 日(神奈川大学)

Hwang, kwukceng(2000)'Sektok kwukyelyu twu kwankyeyceley tayhay'『口訣研究』6, 口訣学会, Seoul

影山太郎(2011)『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店, 東京

菅野裕臣(1990)「朝鮮語—その系統論以前の諸問題—」『日本語の形成』三省堂, 東京

風間伸次郎(2003)「アルタイ語の 3 グループ (チュルク・モンゴル・ツングース), 及び朝鮮語, 日本語の文法は本当に似ているのか—対照文法の試み—」『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター, 京都

金俊英(1964)『郷歌文学』螢雪出版社, Seoul

金完鎮(1980)『郷歌解読法研究』Sewul 大学校出版部, Seoul

河野六郎(1950/1979)「中国音韻史研究の一方向」河野六郎(1979)所収

河野六郎(1979)『河野六郎著作集』平凡社

李喆洙(1989)『養蚕経験撮要吏読研究』仁荷大学校出版部, 仁川

南豊鉉(1999a)『口訣研究』太学社, Seoul

南豊鉉(1999b)『『瑜伽師地論』釈読口訣 uy 研究』太学社, Seoul

南豊鉉(2000)『吏読研究』太学社, Seoul

南豊鉉(2009)『古代韓国語研究』Sikanuy mullay

志部昭平(1990)『諺解三綱行実図研究』汲古書院, 東京

書影・翻刻・国訳(括弧内は略号)

『国訳一切経論部』第一書房 1974

朴通事上(朴上)『朴通事上』慶北大学校国語国文学研究室(1974), 大邱

翻訳老乞大(老)『老乞大上』中央大学校出版局(1972)

三綱行実図諺解(三綱) 志部昭平(1990)による。

釈譜詳節(釈)『釈譜詳節』大提閣(1973), Seoul

大明律直解(大明)『大明律直解』保景文化社(1986), Seoul

杜諺諺解(杜諺)『分類杜工部詩諺解』弘文閣(1985), 光明市

龍飛御天歌(龍)『龍飛御天歌』亜細亜文化社(1973), Seoul

月印釈譜(月釈)『月印釈譜』九・十世宗大王記念事業会(1994), Seoul

楞嚴経諺解(楞)『楞嚴経諺解』世宗大王記念事業会(1996), Seoul

養蚕経験撮要(養蚕)『養蚕経験撮要』李喆洙(1989)所載

瑜伽師地論(瑜伽) 南豊鉉(1999b)所収

於一切種不能出離

於一切種不能出離

〔於〕一切種不出離能不ハッガ

〔於〕一切種不出離能不ズシテ

規則

- ① 左側に口訣が振られている字は読み飛ばし右の口訣に従って読ませ。
- ② 反読点「・」に出合ったら左側の一番近くの口訣(ないし)反読点に上がれ。
- ③ 左に反読点「・」があつたら同じ左側を更に上がれ。

相應愛如是名為處在家位所對治  
 法由此障畢於一切種不能出離設





### 現代朝鮮語

名詞派生	動名詞形成	已然連体	未然連体
-m	-m	-n	-l
-ki	-ki		

### 用語解説

○借字表記法 漢字を用いて朝鮮半島の言語を書き表す方法。以下の①～④に分類される。

①吏読(りとう) 漢字を用いて朝鮮半島の諸言語を表記する方法。高句麗、百済に萌芽的な「初期吏読」が見られるが、韓語の形態素を積極的に表記したものは三国時代の新羅から始まる。統一新羅を経て朝鮮時代(李朝)最末期まで用いられた。日本の変体漢文(史部流、和化漢文)から宣命書き、候文のようなものまでに相当する。

②郷札 「郷歌」表記のための借字表記法。日本の万葉仮名に相当する。

③口訣 漢文訓読のための訓点。以下の通りに分類される。

○積読口訣 漢文訓読のための訓点。

ア) 積読字吐口訣 漢字の略体を用いた略体口訣(日本の片仮名に相当)。

イ) 積読点吐口訣 日本のヲコト点に相当する

○順読口訣 漢文直読にテニヲハを書き込んだもの。漢字を使うものと略体口訣を用いるものがある。日本には相当物がない。

④固有名詞、郷名表記 日本の万葉仮名に相当する。

今回の発表の対象とする資料は①、②及び③のア)の1443年以前の資料である。

### 正誤表

p.19 最下行～p.20の2行目：例文53)の「奢摩地定」→「奢摩他定」

